

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 3 年 6 月 26 日現在

機関番号：34302

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2020

課題番号：18K11851

研究課題名（和文）観光倫理教育の深化に向けた哲学的・倫理的基礎研究

研究課題名（英文）The basic philosophical and ethical research for deepening the education of tourism ethics

研究代表者

原 一樹（Hara, Kazuki）

京都外国語大学・国際貢献学部・教授

研究者番号：90454785

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の主な成果の第一番目は、地域文化観光において人々がいかなる形で「価値の発見・価値の伝達・価値の創造」に関与しているか、今後どう関与すべきか、という問題について、高野山観光における経験的調査を基礎としつつ、概念的に解明した点である。主な成果の第二番目は、日本においていかに倫理的観光者を増加させることが可能かという問題について、経済的主体としての倫理的観光者、及び文化的主体としての倫理的観光者という二つの側面に分け、具体的に現状を分析し、今後いかなるアクターが何に取り組めば良いかを解明した点である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の第一番目の成果は、地域文化観光における「価値の発見・価値の伝達・価値の創造」という問題にいかに関わっているか、関わるべきかを解明した点にある。この成果は、観光振興に関する基礎的事態について学術的理解を深めたのみならず、各地域の実践の現場にも有用である。第二番目の成果は、日本における倫理的観光者をいかに増加させるかという問題への分析と提言であり、学術的には特に、観光における文化経験の含意を解明した点、実践的には、各アクターの取り組むべき事柄を明瞭化した点に意義がある。

研究成果の概要（英文）：The first main finding of this research is the conceptual explication of the problem of “discovery of values, communication of values, and creation of values” in cultural tourism in Japan. This research clarifies this problem using the experiential research results of inbound tourism in Mt.Koya. The second main finding is the explication of the problem of how to increase ethical tourists in Japan. Dividing ethical tourists into two aspects, namely, ethical tourists as economic subjects and ethical tourists as cultural subjects, this research considers current situation in Japan and suggests desirable actions of various actors.

研究分野：観光学、哲学、倫理学

キーワード：観光と哲学 観光倫理 観光教育 哲学的実務家 倫理的観光者 地域文化観光 高野山

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

研究の開始当初、観光立国化を目指し日本国内でも様々な政策が実施され、経済界も観光関連産業の更なる発展に向け活発な取組みを進めていた状況のもと、観光関連産業で高いマネジメント能力やイノベーション能力を発揮できる経済学的・経営学的な力を持つ人材の育成が急務であるとの共通理解が存在していた。他方、日本が真の成熟国家として、豊かな観光資源を活用しつつ観光大国、即ち文化大国となる為には、短期的な経済的利益の追求のみならず、現在の人類が共通で抱える様々な問題(国連が提唱する「持続可能な開発目標」に関する諸問題等)を適切に認識し、「観光」に関する哲学的・倫理的次元での本質理解力を持ち、経済的価値のみならず、様々な価値規範(美的・宗教的・道徳的・文化的・環境的等)に照らしつつ「より良き観光社会」の到来を倫理的に希求し、その実現の為に自らの持ち場で主体的に活動できる人材の育成もまた、必要かつ重要なことであると見受けられた。

この哲学的・倫理的な知識や分析力と、「より良き観光社会」実現への志と行動力を兼備する観光人材の育成の必要性は、国外の研究文脈では、著名な観光学者 J.Tribe による「哲学的実務家」育成の提案や、観光研究者ネットワーク TEFI(Tourism Education Futures Initiative)が提唱する、5つの倫理的価値に基礎を持つ教育プログラムの提唱などでも訴えられていた。また、著名な観光学者 R.Sharpley による、「大学のユニークな機能は、キャリア教育のみならず、社会発展全般に貢献する意志を持つ批判的・理性的・創造的な個人の育成にある」との表現も、本研究の学術的背景の一つを象徴する言葉であったと言える。

2. 研究の目的

本研究は、3年間の研究期間において、著名な観光学者 J.Tribe による「哲学的実務家」育成への提案を理論的背景の一つとしつつ、観光現象が活発化し存在感を増すグローバルな観光社会において、観光現象に関する哲学的・倫理的な観点からの本質理解力と批判的分析力を持ち、観光政策や観光ビジネスを中心とする様々な社会の現場で、「より良き観光社会」の形成に向けて主体的に分析・提案・行動が行える観光人材を育成する為の教育内容や教育手法を構築するための基礎研究を行うものであった。

3. 研究の方法

本研究は基本的には文献・資料調査を基本的手法として進められるものであったが、特に観光に携わる人々と諸価値との関わり方に関する研究においては、地域文化観光の事例として、高野山における外国人観光客に関するフィールドでの調査結果を踏まえつつ、考察を展開した。

4. 研究成果

(1) 2018年度は、観光に携わる人々と諸価値との関わり方についての概念的整理を行った。具体的には、外国人観光客の増大が続く高野山を主要な事例として、人々がいかなる形で「価値の発見・価値の伝達・価値の創造」に関わっているか、現地の人々への聞き取り調査や外国人観光客へのアンケート結果を踏まえつつ、他地域に地域文化観光の推進にあたり留意すべき点への示唆を与えることも目指し、哲学的次元での考察を展開した。この成果は『地域文化観光における価値の発見・伝達・創造 高野山を訪れる外国人観光客を手がかりに』と題し、2019年7月刊行の哲学雑誌『ひとおもい』創刊号(東信堂)に掲載された。以下が特筆に値する論点である。

まず、地域文化観光における「価値の発見」について、特に高野山など、外国人観光客の訪問が多い地域においては、外国人が地域に見出す価値と日本人が見出す価値との間にズレが存在しうる点、外国人観光客が地域文化に新たな価値づけや価値表現を与えたりしうる点、外国人観光客の方が日本人よりも深く地域文化を体験するケースもありうる点が重要である。その上で、このような「外部からの価値の発見」に対しては、「外部からのまなざし」に過度に迎合し、域文化の本質を見失わないよう心掛ける姿勢が必要であり、地域住民が自らの文化の価値や可能性を再度自覚し、反省的に捉え直す必要性もある。

次に、地域文化観光における「価値の伝達と解釈」について、高野山においては、現地で典型的な観光者が行う一連の体験から成る「観光の回路」が成立しており、その情報が訪問前の観光者の期待を形成していると言える。その上で、観光者が「自分だけの旅の価値」を形成する際には、「現地ガイドからの価値の伝達」が重要となる。この点に関連し、現地でのガイド等による「価値の伝達」に先立ち、そもそも地域側がどのような人々にどのような価値を伝えたいのかという点に関する根本的な考え方を確立しておくことが必要であり、観光者による文化解釈があくまでも自由でありうる点、文化の真正性に関して観光者が疑いのまなざしを持ちうる点について認識しておくことが必要である。

最後に、地域文化観光における「価値の創造」について、高野山においては、「観光行動を円滑するための価値創造」として、様々な観光インフラ(外国語表記、ピクトグラムを用いた案内板、電柱の地中化等)の再整備が行政主導で進められている。この事実について、日本の古くからの代表的な宗教聖地の場所のたたずまいが変容を遂げつつある点を認識しておくことが必要である。次に、高野山における「観光体験の充実に向けた価値創造」として、外国人観光客の受

け入れに際して「宿坊」が様々な変化（英語対応、ネット予約、ナイトツアーの実施等）を遂げつつある点が重要である。高野山においては、文化的価値のアイデンティティが堅固であり、現代的变化が文化的アイデンティティの決定的な変容や喪失には至っていないと見受けられるが、各地域においては、文化的アイデンティティの喪失に陥らないために、観光に対する文化の先行性、文化の持つべき保守性に関する認識を持つことが必要である。加えて、地域文化観光における価値の創造に際し、地域の人々が、自らの文化の本質的価値を問い直す視点や、中長期的に物事を見通す時間感覚を保持することが重要であり、「価値創造の価値を評価する共同での取り組み」を推進することも必要である。

(2) 2018年8月には、マレーシア科学大学で開催された国際フォーラム“INTERNATIONAL SYMPOSIUM ON HERITAGE, GASTRONOMY & TOURISM: A REFLECTION”にて、“World Heritage Sites and Spiritual Tourism: The Case of Mt. Koya”と題し、口頭発表を行った。この発表においては、外国人観光客が増大しつつある高野山の観光状況全般について解説したと同時に、観光者による解釈の形成、真正性、商業化をめぐる諸問題について、哲学的・倫理的観点からの考察を展開した。

(3) 2019年度は、持続可能な観光の発展に向け重要なアクターとなる観光者に焦点を合わせ、研究を進めた。特に、責任ある観光・倫理的観光を行う観光者の日本における育成に向けた課題、及び具体的に実施すべき事柄の整理を行い、論稿「日本における倫理的観光の更なる推進に向けて - 倫理的観光者の育成に向けた概念的整理と実践的諸課題」として取りまとめた。内容としては、国際機関・組織（UNWTO, GSTC）が倫理的観光者への推奨行動として提示する事柄の内実や含意を整理・吟味し、経済的主体としての倫理的観光者の育成と、文化的主体としての倫理的観光者の育成の2つの側面から、消費や教育の場面で観光に関わる各アクターがいかなる実践を行う必要があるかを論じた。特筆すべき論点は以下である。

経済的主体としての倫理的観光者の育成という課題については、まずは、日本において倫理的消費という考え方に関する理解が進みつつあるが、いまだ実際の行動としての倫理的消費が社会的に大きく普及しているとは言えない現状を踏まえる必要がある。その上で、学校教育という文脈では、環境教育（文科省・環境省）や消費者教育（消費者庁）の更なる展開を進めつつ、同時に、いまだ不十分である、倫理的消費を行う観光者に関する教育を、初等・中等・高等教育に適切に組み込んでいく必要がある。また、現役世代の観光者に対する教育や啓発事業に関しては、観光関連事業者・政府自治体・DMOやメディアの役割が重要になる。特に重要な点としては、環境負荷が小さく地域経済への効果を最大化するような倫理的観光商品の開発・販売と認証の取得、及び倫理的観光商品に関する効果的な情報提供の2つが挙げられる。

文化的主体としての倫理的観光者の育成という課題については、大枠としては、UNWTOやGSTCが提唱する倫理的観光者に推奨する行動のうち、特に旅行中と旅行後の行動について、具体的内実を検討する必要がある。これは即ち、他者の文化を経験し享受する際に自覚しておくべき点や注意すべき点を洗い出し、それらを理解している観光者を育成することであり、主要な舞台は学校教育の中での観光者教育となる。

具体的には、まず「訪問先の多様な文化の尊重と幅広い経験」という推奨行動について、観光者が自分の訪問先での経験の部分性を自覚することや、観光経験の人為的な構築性に関して反省的であることが求められる。また、「訪問先の文化やアイデンティティに関する直接的な知識を得ること」という推奨行動については、旅行先に対して事前に有しているイメージや想像物と異なる「齟齬」を経験することの重要性や、訪問先の他者との交流を通して、自分自身と訪問先の人々との同じ人間としての共通性と差異の両方に気づくことの重要性、他者のアイデンティティに関する理解を深めることで、翻って自分自身のアイデンティティに関する理解が深まることを理解することの重要性が強調される。旅行後の推奨行動としては、旅の評価に関する率直な情報発信と、訪問先と継続的に関わり続けることが提唱されているが、情報発信については、自らの旅先に関する評価の相対性への反省意識を持つことが必要であり、訪問先との継続的な関わりについては、その理由として、観光が持つ「自己同一性が拡大し成長する可能性」や「主体的実存の土台の再編成」という大義への貢献が挙げられる点を理解することが必要である。

以上のように「文化に鋭敏な観光者」を育成するためには、初等・中等・高等教育の現場において、単に観光に関する倫理的諸規則の内容やその遵守を教えるのみならず、観光者としての自分自身の観光経験の質や、自らの観光行動が生み出す善について反省する姿勢を体得させるような教育を展開する必要がある。そのためには、観光経験の様々な質やニュアンスを多角的に学び反省する機会を設けることや、自らの観光経験を端緒とした問題探究や情報発信等の文化創造を試みる機会を設けることなどが、重要な教育実践となる。

(4) 2019年度には、実際に所属先大学の教育実践として展開している観光倫理教育の内容・現状・課題について、講義系の科目（「観光倫理学」等）と実践系の科目（「コミュニティエンゲージメント」）とに分け、「京都外国語大学における観光倫理教育の現状と課題に関する報告」と題し、学会報告として取りまとめた。また、「京都観光アカデミックアライアンス」のシンポジウム「観光における本物と偽物」に登壇し、観光における真正性に関わる問題について議論した。

(5) 2020年度は、観光現象に関する哲学的・倫理的な観点からの本質理解力と批判的分析力を持つ人材の育成に向けた研究の一環として、アクターネットワーク理論をいかに観光現象の調査に活用すべきかという問題について、ANT理論自体や観光学者による先行研究を踏まえつつ考察を行った。この成果を論文として発表した後、倫理的観光の推進、及び観光倫理教育の深化に資する基礎研究として、観光経験に関する哲学的分析を多角的に行う研究計画に着手する予定である。また、2019年度からの継続事業として、「Tourism development and World Heritage site, local culture」と題し、海外諸国の公務員向けの研修である、JICA 課題別研修【世界遺産の適切な管理を通じた観光振興】の講師を務め、その中でも倫理的観光に関する話題や情報を提供した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 原 一樹	4. 巻 1
2. 論文標題 地域文化観光における価値の発見・伝達・創造 高野山を訪れる外国人観光客を手がかりに	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『ひとおもい』	6. 最初と最後の頁 55 - 81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 原 一樹	4. 巻 95
2. 論文標題 日本における倫理的観光の更なる推進に向けて：倫理的観光者の育成に向けた概念整理と実践的諸課題	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 研究論叢	6. 最初と最後の頁 61-78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 1件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 原一樹
2. 発表標題 京都外国語大学における観光倫理教育の現状と課題に関する報告
3. 学会等名 日本観光ホスピタリティ教育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kazuki Hara
2. 発表標題 World Heritage Sites and Spiritual Tourism: The Case of Mt. Koya
3. 学会等名 INTERNATIONAL SYMPOSIUM ON HERITAGE, GASTRONOMY & TOURISM: A REFLECTION（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

・「観光における本物と偽物」パネルディスカッション（2019年9月21日・京都観光アカデミックアライアンス・シンポジウム）パネリスト参加
・「Tourism development and World Heritage site, local culture」（JICA課題別研修【世界遺産の適切な管理を通じた観光振興】）セミナー講演
・論文「日本における倫理的観光の更なる推進に向けて：倫理的観光者の育成に向けた概念整理と実践的諸課題」（『研究論叢』95巻掲載）は、以下からダウンロード可能である。
https://kufs.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=400&item_no=1&page_id=38&block_id=50

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------